



「希望の登校 満足の下校」を目指して ～子供たちも教職員も幸せに過ごせる学校づくり～

我孫子市立我孫子第三小学校校長 加藤 貴久子



1 はじめに

学校は、学級担任や授業など個々の教職員に任されている部分が多い組織であり、教職員一人一人の指導力の向上が不可欠の組織でもある。

一方で、多様化する教育課題を乗り越えていくためには、教職員一人一人のより高い指導力と対応力を磨くとともに、学校全体で組織的に課題に取り組むことが求められる。

本校の学校教育目標「自ら学び 支え合いたくましく生きる子の育成」の具現化のために校長として私が大切にしていることは、教職員が主体的に学校運営に参画し、各々がもつ力を発揮することである。そのために、心がけていることは、子供たちも教職員もウェルビーイングを高め、幸せに過ごせる学校づくりである。

2 学校の「人財」＝教職員の育成

急激な社会の変化に対応し、今日求められている資質・能力を育成するために、我々は日々全力で取り組んでいる。社会がいかに変化しようとも、社会の変化にしなやかに対応しながら、教育をつかさどることのできる人材の育成は校長の責務であると考えている。

(1)誰もが安心できる学級経営の充実

本校は、通常の学級が21学級、特別支援学級が8学級の合計29学級で全校児童は709名の規模の学校である。配慮が必要であったり、困難さを抱えたりしている児童は、通常の学級においても一定数存在している。また、5

年経験以下の教員数は、30%弱である。そのような状況のなか、学校生活の基盤となる学級が居心地のよい場所となるようにしていくことは、本校の課題の一つである。

学級経営が、主体的・対話的で深い学びの実現や子供たちの非認知能力の向上に重要であり、子供たちの成長に必要な学び合うための環境を保障することにつながると考え、教職員に次の4点について学校経営の重点として繰り返し伝えている。

- ①子供たちの安全・安心な学校生活の保障
- ②心理的安全性の保障された学級経営の充実
- ③発達支持的な生徒指導
- ④授業力向上

心と体の健康や学校安全等を重要視した教育課程を編成し、安全・安心な学校づくりに取り組むことを4月最初の職員会議で示し、全教職員で共通理解を図った。子供たちが安心して学校生活が送れるようにするためには、心理的安全性を保障していくことがとても大切であり、そのために具体的に何をしなければならぬのかを丁寧に議論した。また、発達支持的な生徒指導についても、改訂された生徒指導提要の考え方をもとに、折に触れ教職員の理解を促している。

(2)学び続ける教職員集団を目指して

本校では、校内研究とは別に、教職員の課題意識に応じて自律的な研修を組織的・計画的に実施している。学校を、教室を、安全・安心な場所にする事で「希望の登校 満足

の下校」を実現するために、これまで行ってきたボトムアップ型の教職員研修について、その一部を紹介する。

○新年度準備研修、教師力向上研修

「学級づくり」、「家庭連携」、「個人面談」、「楽しい学校生活を送るためのアンケート活用」

○組織的対応研修

「学校問題対応」、「いじめ防止」

○フレッシュ研修



学級づくり研修

年度初めの始業式前に、ミドルリーダーが講師となり、全教職員で学級経営についての研修を行った。学級担任の約25%が今年度、本校に異動してきた職員という現状からも、学級づくりについての準備は必要不可欠なものである。チーム三小の一員として全教職員が士気を高め、スタートを切るのにふさわしい充実した研修となった。

(3)校内巡回と教職員へのフィードバック

私は校長として、授業を巡回し、日々の授業観察を通して日頃から情報収集を欠かさないように努めている。そして、教員や学級、児童の様子や課題を把握し、これをフィードバックすることで、個々の教員への適切な支援を行っている。学級の質を高めれば学校力

も自然と高まると信じ、これからも子供一人一人が生き生きと安心して生活できる温かい学級経営をすべての教員が行うことができるよう、きめ細かな指導や助言を続けていく。

また、教頭、主幹教諭や教務主任、養護教諭、事務職員（校務会のメンバー）は日々教職員から相談や報告を受けている。そのことについて、校長と情報を共有することによりチーム学校として組織的に対応できるようコミュニケーションを図っている。

3 みんなの居心地を大切にするために人権感覚を育む

毎日の学級経営に欠かせない教師の職能の一つに「人権感覚」が挙げられる。子供たちの人権感覚を磨き、その輪を学級全体、学校全体に広げていく。そのために、まずは教職員同士の会話量を保障することに注力した。会話がなければ人間関係は構築されない。職員会議や校内研修を対話型のものとし、更にインフォーマルなコミュニケーションを増やすことが必要であり、おしゃべりと笑顔のあふれる職員室を目指している。また、全校朝会や始業式・終業式では、子供たちに向けて、自他のよさを認め合い共感的理解を育むことの大切さを校長講話として伝えている。

4 おわりに

学校は、教職員にとって働きやすく、達成感や明日への活力を見いだせる場所であってほしい。そして、子供たちにとって「希望の登校 満足の下校」の場所であってほしいと願う。日々の課題は山積しているが、「教職員を育て、学校運営を円滑にし、子供たちも教職員も幸せに過ごせる環境を整える」という校長の役割をこれからも全力で果たしていきたい。



「保護者・卒業生・地域に 支えられた教育活動について」

県立浦安高等学校教頭 よしだ 吉田 みかこ 美佳子



1 はじめに

本校は、千葉県の海面埋め立て事業により誕生した「海楽」という土地に、当時「浦安町」の誘致活動により昭和48年4月に開校し、52年目を迎える学校である。「海楽」という地名は、戦前に遠浅の砂浜を利用した「海楽園」と呼ばれる潮干狩りの行楽地があったことに由来している。本校は、平成16年度から10年間自己啓発指導重点校の指定、平成27年度から学校運営協議会を設置等の歴史がある。その中から、学校を支えてくださった保護者・卒業生・地域の方の取組を紹介する。

2 コミュニティ・スクール

本校は、平成27年度県の指定を受け学校運営協議会が始まり、10年目を迎える。委員は自治会から2名、学識経験者、市役所（卒業生）、地域企業、キャリア教育に関するNPO法人、同窓会会長、PTA会長、中学校校長、本校校長の計10名で、年間3回協議会を開催する。5月の協議会では、校長の経営方針に関し多くの質問や意見が出され、学習活動、キャリア教育、地域の高齢化について協議がなされた。生徒の昨年度の成果を今年度に活かすためにどのような活動が必要かという視点で意見が出され、協議会に参加した本校職員の分掌主任、学年主任も「育てたい生徒像」を改めて確認することができ、今年度の活動方針の参考となった。



5月の学校運営協議会の様子

3 同窓会の活動

毎年6月の第一木曜日に総会が開催される。その一週間前に役員会が開催され総会の議事案を作成する。役員は第3期生から第15期生の7名で構成され、創立50周年記念事業の祝賀会は同窓会の運営で行われた。同窓会からは学校援助費として県大会出場激励金、卒業証書ホルダー代を支援していただいている。

4 PTAの活動

通常の役員会、理事会、総会等の開催はもちろんのこと、その他に全国高等学校PTA連合会大会、関東地区高等学校PTA連合会大会、県定期総会、県研究集会、地区研究集会は、会長、副会長を中心にすべて参加している。

広報・研修委員会では、年2回の広報誌発行、研修の立案、実施を執り行っている。今年は雨天ではあったが、豊洲へのバス研修を行うことができた。

また、年3回学期末に参加者を募って、挨拶運動と美化活動を実施している。



7月の登校指導、この後美化活動も実施

今年の大きな目標は、コロナ禍で実施できずにいた文化祭での食品販売の復活であった。コロナ禍で実施方法が経験者から引き継がれていない不安を抱えながらではあったが、保護者の意気込みは強く、夏休み中も何度も集まり準備をしてくださった。当日も30名以上の保護者の力が集まり、食品販売を成功させることができた。

5 文化祭支援委員会の活動

これは、保護者・卒業生・地域を結びつける組織で、同窓会、PTA、野球部OB会、自治会からなる。10年以上前から同窓会が文化祭で出店し文化祭の支援をさせていただいていたが、コミュニティ・スクールができた頃に委員会として組織された。これは他の学校にない組織であろう。主に文化祭で出店をし、収益金は学校に寄付される。図書館の書物購入や同窓会館の修繕費として使われている。今年はコロナ後初めての調理を伴う出店



マドレーヌ作りの様子

に挑戦をした。夏休みに支援委員会の会議、その後消防署へ火気使用の届け、仕入れ、調理器具の調整など学校とは別の組織として連携して細かなところまで段取りが組まれている。

る。前日には中央公民館で保護者がマドレーヌの仕込みをした。当日は猛暑であったが、おいしい匂いに多くの生徒、来場者が引き寄せられ大盛況だった。



9月の文化祭・学校支援委員会の様子

6 おわりに

これまでに12,000名を超える卒業生が社会へ羽ばたき各分野で活躍している。50年の歴史の中で生徒指導に力を入れた学校改革、少子化に伴う募集人員確保など、決して平坦にはいかない時期もあったが、保護者や卒業生の支えがあって浦安高校の歴史が作られていることを痛感している。

教頭として、保護者や卒業生等にできるだけ多く来校していただけるよう、早めに開催通知を送るよう心掛けています。また、学校に来ていただいている時間が有意義であったと感じていただくために、自分自身が一人一人の方と会話をして交流を深め、学校を知ってもらい、時には学校運営のヒントになることをいただけるよう、その交流の機会を大切に過ごしている。

浦安は漁師の心意気が根強い地域である。明るく、人情味あふれ、お祭り好きな方々が、「浦安高校が好きだ」と学校のために足を運んでくださる。「何かできることはないか」「一緒にやろう」と、現代では難しくなった人と人との繋がりの中で、私も浦安愛を持って生徒を支えていきたい。



「笑顔あふれる学級」を目指して

多古町立久賀小学校教諭 たかはし しほ 高橋 志穂



1 「笑顔あふれる学級」を目指して

笑顔は子供たちの心が開放されているかどうかを確かめる一つのバロメーター。安心して自分の力を発揮できる空気が教室にあるかどうか。その空気に敏感でありたい。だから「笑顔あふれる学級」が毎年、私の目標だ。

(1) 当たり前だけれど大切な「上機嫌力」

「この先生の学級は、いつもすばらしいなあ。」そう思う先生は、共通していつも、楽しげだ。笑顔が生まれるような実践を仕組むことはもちろん有効だけれど、もう何も考えずに担任が笑顔で子供たちと接することが、まず一番なのではないか。それが、何より子供たちの安心感につながると。現実には、教育現場では様々なことが起こり、明るくにこにこ穏やかにしていることが難しいと感じることもある。でも子供たちの背景には、もっと様々な家庭環境があり、中には家で居場所のない子や、親に甘えたくても甘えられない子もいる。そんな時に、学校に来て、学級に来れば安心できる、そんな場所であるためにも、担任はやっぱり笑顔でいたいと思う。

(2) 大切なのは「伸びたか伸びないか」

子供たちの「やった!」「できた!」の笑顔のガッツポーズと一緒に喜べる時は、教師として本当に嬉しい瞬間。私は、子供たちに、「できたか、できないか」ではなく、「伸びたか、伸びないか」を大切にすることを繰り返して話す。そして、一人一人の頑張りの過程や進歩を、何とか見逃さないように全力で見とる。「時間がかかっていた計算問題が、

今日はすらすら解けたね!」「前よりもスムーズに読めるようになったね、すごいよ!」「発表の声が大きくなってきたよね!成長しているね。」たとえ小さな伸びであっても、教師がポジティブにフィードバックする。そうやって小さな伸びを価値づけることで、子供たち同士でも友達の頑張りや伸びを見つけ、応援し、一緒に喜べるようになって信じている。その風土が根付くと、学級の雰囲気ぐんとよくなり、子供たちの笑顔が増えることは間違いない。保護者にも折に触れ、懇談会や学級通信で場面を拾って、この思いを伝えている。家庭の追い風があれば、効果も抜群だ。

(3) 安心して失敗できる 〜ドンマイ!〜

「伸びたか伸びないか」で評価する価値観が浸透すると、失敗を学びの一部としてとらえることができる。間違え（失敗し）て、考えて、そうやって成長しようねと笑い合う。子供たちには、自分の失敗談をたくさん話す。私はもともとおっちょこちょいなので、失敗談は尽きない。クラスの誰かが失敗すると、すかさず声を揃えて明るく「ドンマイ!」の音が響く。「志穂先生が、一番ドンマイが多いよね。」どの学級を担任しても、たいがい子供たちから言われる。失敗の姿を見せたり、間違ったら「ごめんね。」と謝ったりする大人の姿を見せることも、子供たちの安心につながるのかも。

(4) エンブレム&合言葉をつくろう

こんな学年、こんな学級にしたいという担任の思いを込めて毎年作る。学年通信のネー



ミングもこれで。行事や学年・学級の活動でおおいに活用！拡大して教室に掲示。印刷してシールにしたり、ラミネートしてカードにしたりして、とっておきのときのプレゼントにすると、子供たちはとても喜ぶ。学級に対する思いや学級全体の連帯感を高める一助に。1年間が終わるときには、このエンブレムが学級みんなの宝物になっている。

合わせて新学年のスタートには、どんな学級にしたいかを話し合い、その実現のためにどうするかを合言葉として決め、掲示。合い言葉が飾り物になってしまわないよう「みんなで決めた私たちの合い言葉」という意識を根付かせることが何より大事。行事等ことあるごとにこの合い言葉に返り、めあてをもち、振り返りをする。子供たちにとって本当の意味での大切な「合い言葉」になっていくため。

ちなみに今年度は持ち上がりの4年生担任。3年生では「キラリと光るいいところ いっぱい見つけてぐんぐんのびるよ!」。今年度は、SUPERキラりんズに進化し、「キラリと光るいいところ みんながみんなを応援します!」が合言葉。お互いの頑張りを応援し合える学級にしていこうと、日々奮闘中。

(5)話し合い活動&学級集会で子供が育つ!



子供たちは、楽しいことが大好き。「仲よくすること」「協力すること」の大切さにつ

いて、言葉をたくさん並べて説明するよりも、実感することが一番。自分たちで話し合い、みんなで決めたことを協力して実践する。成功体験、満足感、達成感を得る活動を積み重ねることで、子供たちは自分も期待されている仕事がある、必要とされている、学級にとって自分は大切な存在であることに気付く。学級への満足感も高まり、互いによさや違いを認め合える人間関係を築くことができる。「本当に楽しかった」と思えた後の子供の顔は、とてもすてき。「みんなでやって楽しかった」「やってよかった」という経験をたくさんさせたい。課題も次に活かせる。話し合い活動、学級集会は、子供が変わる、学級が変わる、「人間関係作り」の絶好の機会だと実感している。だから、意図的に仕組んでいく。

(6)がんばりを宝物にして積み上げて



学級会で話し合って実践してきたことや、協力して行った行事などみんなで何かを成し遂げたときにメダルや短冊に記入して掲示。自分たちの成長や学級に対する思いが可視化でき、学級全体の連帯感につながっている。

2 おわりに

私が大切にしていることや紹介した実践は、今まで出会った尊敬すべき素晴らしい先輩、同僚、後輩から学び、真似をしたものばかり。真似をし、実践してみて、効果が絶大と実感し、今も続けていることを書いてみた。この原稿を書きながら、その時々のことを改めて思い出し、様々な出会いに恵まれて現在があることを実感した。本当に感謝しかない。

悩みは尽きない毎日だが、プラス思考でこれからも、謙虚に学び（真似び）続けたい。



本音で語り合える集団づくりの工夫 ～思考ツールを用いて～

袖ヶ浦市立平川中学校教諭 かわかみ 川上 かなこ 加奈子



1 はじめに

現行の学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が改訂の方針の1つに挙げられている。本校の授業を見ても、生徒が対話しながら学んでいる様子が多数見られるようになった。一方で、学級生活を見ていると、仲間に同調するだけではなく、自分の本来の意思を表現しないままに会話をしている場面を見かける。

私は、生徒の学校生活の基盤となる学級が常に「生徒一人一人が本音で自分の考えを語り合える場」としたい。学級で多くの語り合いができることで、自ずと生徒相互の磨き合いや高め合いが生まれ、その繰り返しの中で、生徒個々の自己実現につながると考えている。

そこで、ここでは今年度の学級開きから9月まで、主に思考ツールを用いて行った学級での「語り合える集団づくり」にむけた実践を中心に紹介をしたい。

2 学級の実態

本校は、全校生徒208名、第3学年は75名と小規模校である。本学級（3年2組）は男子22名、女子15名の計37名で構成されている。生徒は地域の2校の小学校から進学しており、その関係性を中学校でも引きずることが多く、交流関係が広がらない。穏やかで内向的な生徒が多く、自己表現を得意とする生徒が少ない。学級で自分の考えや想いを伝える場面では躊躇する生徒もいる。

3 具体的な実践

(1)4月の学級目標づくり

4月の学級目標づくりでは、小学校からの仲間や初めて同じ学級で過ごす仲間と、様々な考えや想いを共有し合った。自己表現の第1段階として、「自分の考えをとにかくアウトプット!」ということを目指して「ブレインストーミング」と「KJ法」を用いた。「どのような学級にしたいのか」「どのようなことを一人一人が心がけるべきか」について、小グループ内で考えを出し合い、意見を整理した。「みんなが笑顔」・「勉強に集中」・「行事は全力」・「最高の思い出」など、多くのキーワードが並んだ。生徒の内に秘めている前向きな想いはまだまだあると感じた。この時間は、最終的に「希望の進路実現」「後輩の手本」「全行事に全力投球」の3つに集約され、スローガンは「一笑懸命（いっしょうけんめい）」に決定し、今年の1年間がスタートした。

(2)修学旅行の取組

①出発前の取組

5月には中学校生活最後の体育祭があった。その後の待ちに待った修学旅行の取組では、自己表現の第2段階として「多くの情報に重要度をつけて整理しながら語り合う」ことを重視して「ピラミッドチャート」の方法を用いて取組目標を立てた。班での話し合いでは、重要度の決定のために自分の考えを述べる姿が多く見られた。最終的には「今日と（京都）いう日を大切に」という取組スローガンとともに取組目標を決定し、そのための役割分担

等の確認をした。同じ言葉でも、そこに重要度を加えたことで、会話に深まりが見られた。

②帰着後「思い出」を語り合う場面

帰着後、学級の実組スローガンのとおり「大切な思い出」が何かを語り合う時間を設定した。この中で、一昨年度、校内研修で南房総教育事務所の三浦貴子指導主事（現 富津市立吉野小学校長）をお招きした際に学んだ「〇〇は、〇〇となって、〇〇となって、〇〇となる」という文型に当てはめて考えさせた。

生徒が発表した言葉の中には、

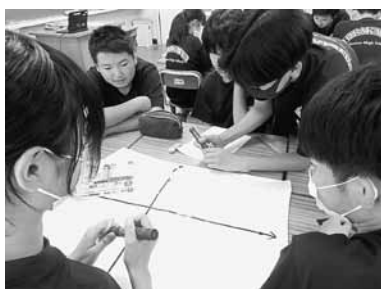
「修学旅行は、皆が笑顔となって、一生の思い出となって、宝物となった」

「修学旅行は、素晴らしい経験となって、かけがえのない時間となって、己の成長となった」

等、全員の言葉に個性が表れていた。それと同時に、子どもたちが少しずつ自信をもって表現できるようになった。

(3)7月「前期前半の学級振り返り」

7月の夏休み前の学級の振り返りでは、自己表現の第3段階として、班ごとに「座標軸」を用いた。縦軸は「人間関係」、横軸は「きまり」として、丸いカラーシールを貼り、付箋やメモ等を用いずに「自分の言葉で理由を述べる」活動とした。最終的には班で話し合う中で合意形成し座標点を決めた。班の最終的な座標点を決めるにあたり、一人一人の生徒が自ずと自分の意見や仲間の意見を聞き合って決定する様子が見られた。



(4)9月「合唱祭の実組目標」

9月には11月の合唱祭に向けた実組目標を考えた。合唱祭は中学校生活最後の大きな行事であるため、多くの成功体験を積みませようと「フィッシュボーン」を用いて多方向から合唱祭の実組を考えさせた。学級での話し合いの結果、「チームワーク」・「気持ち」・「全力」・「練習」という4つの実組の柱が決定した。具体的な手立てについての話し合いの場面では「互いに意見を伝え合う」や「頑張った仲間を認める」といった意見が出された。歌唱が得意・不得意だけではなく「リーダー性」や「計画性」など「自分の長所を学級のためにどう生かすか」という視点からの発言に変容した生徒が多く見られた。さらには、自己表現を苦手としている生徒も、自分の言葉で語れるようになってきている様子が見られた。

この後、合唱練習が開始された。毎日の学級練習の終わりにローテーションで一人一人が「思いを語る」こととなった。初日の生徒の語りとそれを聞き入る全員の姿から「本音で語り合う」学級に近づいていると感じた。



4 今後に向けて

学級は生徒にとって最も身近な社会である。様々な集団活動を通して、多様な人間関係の築き方や、よりよい自分を追求することなどを学ぶ。今後も、引き続き様々な思考ツールを活用しながら「本音で語り合う」集団づくりに努めるとともに、生徒の自己存在感、学級への所属感を高め、一人一人が「自己実現」できる環境づくりに向けて努力していきたい。



自己実現ができる学級づくり ～個人と集団の成長を往還させる教師の働きかけ～

松戸市立旭町小学校教諭 すぎもと かずき 杉本 一生



1 はじめに

先生方は、「教育とは何か？」と問われたら、何と答えるだろうか。私は、教育とは、「日本の未来をつくること」だと答える。目の前の子供たちが成長し、将来の日本や世界を創っていく。では、「学校の役割とは何か？」前述の視点に立つと、学校とは、子供の可能性を広げる場でなくてはならない。そのためには、子供たち一人ひとりが、授業や学級での生活において自己実現を果たしていくことが重要になると考える。マズローの欲求5段階説では、自己実現欲求が最上層に位置付いている。人の行動原理には思いや願いがある。それは発達段階に応じて、質の差はあれども、子供たちも同様である。本稿では、子供たちが自己実現を果たしていく学級経営の具体例をいくつか紹介する。

いため、子供自身のゴールが曖昧になる。学年目標や学級目標という大きな目標は、行事の目標、月毎の生活目標、そして個人の目標にも紐づいてくる。また、自分たちで決めた目標に対して、集団・個人でもふり返りが可能となり、個々の思いや願いを更新することができる。時間をかけてでも、子供たちが丁寧に話し合い、ゴールを設定していくことが重要になる。



写真1 学級目標決めの板書

2 学級は自己実現の場

(1) 目指すゴールを共有する

自己実現を図るために大切なのは、個人と集団の関係性である。どの学年、学級でも年度初めに学年目標や学級目標を決めると思うが、教師から提示することなく、必ず子供たちと話し合いながら決定していく。同時に、学年会で教師の思い、懇談会で保護者の思いを共有し、子供たちにも伝えている。そのため、例年5月中旬～下旬に決定する。一見遅いように感じるかもしれない。しかし、4月当初に、教師から提示すると、その目標には子供たちの思いや願いは一切反映されてい

(2) 係活動を通して自主性を育む

小学校学習指導要領解説特別活動編では、当番活動と係活動は明確に区別されている。係活動は、学級生活を共に楽しく豊かにするために創意工夫しながら自主的、実践的に取り組むことができる活動である。

私は、係活動を会社形式にしている。子供たちが、「あれば学級が少しhappyになる会社」を設立する。求人募集を出し、それに賛同する友達に参加して活動していく。子供たちが、活動期間や活動内容を決め、定期的にミーティングを開催し、活動のふり返りと今後の活動の方針や新しい活動を創造していく。例

例えば、教室を装飾で彩るデザイン会社や自作の4コマ漫画で楽しんでもらおうと考える漫画会社など多様な会社が生まれてくる。このように係活動は、一人一人の個性（よさ）が集団のために生かされ、他者から認めもらえる絶好の機会になる。個人の自己実現欲求は、他者からフィードバックを通して満たされていく。こうした個人の自己実現は、他の活動へも波及し、当番活動、イベントの企画、子供が展開する授業等の創意工夫にも繋がっていき、集団の質を高めていくことができる。



写真2 係活動（会社）のミーティング

(3)授業と学級経営の関係性

私は、若手の時に学級経営が上手くいかないために授業も上手くいかないと悩んでいた。つまり、学級づくりで素地ができていないと対話的・協働的な学びは実現しないと考えていた。しかし、今では全く逆の発想だったと感じている。対話的・協働的な学びでは、コミュニケーションとインタラクションが活発に生じ、学級という学びの協働体が形成されていく。両者は双方向の関係性にある。1日の大半は授業であることを考えると、年間約1000回の授業を充実させていくことが学級経営の基盤づくりになっていく。

一方で、全ての授業を質の高いものにした

いが、現実的には難しい。そこで、自分が得意な教科に注力して授業づくりを頑張ってみることが大切だと考える。各教科等の学びには通底するものが多いあるため、一点集中で教材研究を行うのも良策と考える。個人的には、総合的な学習の時間（以下、総合）をおすすめする。総合は、身の回りや地域の課題に対して、各教科等の学びを総動員して課題解決を図りながら自己の生き方を考えていく学習である。多様な他者と関わり、社会参画を図る過程で、学校の枠を越えた自己実現がなされていく。総合での学びや経験は、個人や集団の成長に大きな影響を与えている。

3 教師は余白をつくる

これまで紹介した実践には、子供たちに余白を与えるという共通点がある。余白の具体としては、子供たちが意思決定をする思考の余白と学級をデザインする環境構成の余白である。2つの余白を生み出す方法については、例えば、教師が指示していたことを我慢して、意図的に抜いていくことで子供は考えるようになる。また、教室環境を教師が決めすぎない、整えすぎないことで子供たちが居心地の良い教室環境をデザインするようになる。

子供の学びは青天井である。教師として大切なマインドは、「せねばならない」よりも、子供たちの思いや願いを大切にしたい自己実現の場を工夫することだと考える。

4 おわりに

子供たちには無限の可能性があり、成長に終わりはない。それならば、私も子供とともに成長する教師であり続けたい。日本の未来をつくる最前線に私たち教師がいる。子供の学びを大切にしながら、県内の先生方と手を取り合い、日本の未来をつくっていききたい。



学級を創る

“誰一人取り残すことのない学級経営” をするために

柏市立柏中学校教諭 村政 雄輝
むらまさ ゆうき

1 はじめに

初任時は3年生の副担任だった。4月の始業式、生徒と出会う初めての記念すべき日。多数の男子生徒が髪を染色し、制服のボタンを全開にして登校してきたところを、学年、学年副、生徒指導の主任が、昇降口で指導する場面から始まった。

もし、私があの当時、学年主任だったとしたら…。あの学年経営はできる気がしない。この3年生は卒業式の日、担任数名が生徒指導で不在の中、学級委員が全て指示を出し、整然と整列していた。指導されていた生徒も思い残すことはない晴々とした表情で式に参列し、見事な卒業式となった。さらに式後、普段通りに全学級が帰りの会を行い、振り返りをしていたのが強く印象に残っている。

当時の学年主任の学年経営・学級経営に影響を受け、今の教育観・指導論につながっている。

2 失敗から学ぶ

2年目、初めての担任は1年生。男子は表面上だけの私との人間関係であり、女子は話を聞けば聞くほど、指導すればするほど、離れていった。体育祭の学年種目で1位を取って、合唱コンクールで最優秀賞を取っても、学級がまとまることはなかった。生徒たちの手で掴み取ったものではなく、私がそうしたくて力づくで取らせた。そう思われていたように感じる。

前年度、副主任だった先生が学年主任とな

り、隣の教室の学級担任となった。その学級の雰囲気の高さ、生徒たちの表情を見ると、自分の力の未熟さを痛感した。

「どうすればこうやって生徒が躍動する学級が作れるのだろう…。」この先生に相談した。

「前年度の学年主任の姿を思い浮かべてごらん。」記憶に残っていたのは、とにかく生徒個々とよく話をしている姿だった。そして、話し終わった後の生徒たちの表情が変わったことだった。「あれは、ただ説教されたり、助言されたりするような話の内容じゃなかったのかな…。」と気になり、卒業生が来校した際に聞いてみることにした。話の内容は「あいつ、最近元気ないけど何かあったか?」「頼みごとがあるのだけど、やってくれないか?」「お前のおかげで助かった。ありがとな。」というものだった。

学級経営とは、体裁を整え、高圧的な指導で生徒を矯正していくものだとばかり考えていた。「手はお膝」と私自身も育てられてきた。この話を聞いたときの衝撃は大きかった。この時初めて「生徒と生徒の人間関係を結びつける」ことが学級経営に大きく影響しているのだと知った。そして、それは学級の雰囲気を良くするだけでなく、授業態度が良くなり、学力向上にもつながり、誰もが安心して過ごせる教室になっていくことを、実践を以て体験した。

「学級経営とは、個別指導だよ。」

初任時の学年主任の言葉が、今につながっている。

3 学級開き～10日まですべてが決まる～

(1)学級開きまでにすること

- ①学年会議で「班づくり」「学級組織づくりの手順」「朝・帰りの会のプログラム」「朝・配膳・清掃の時間の教員の配置」の承認を学年職員から得る。
- ②机・椅子の個数、落書き、環境物の確認。
- ③引継ぎ事項に目を通すが、先入観は持たない。初日にどんな言葉をかけるか想定しておく。
- ④学級の生徒一人一人に手紙を書く。(これまでの担任とは違うな…と思わせる。)
- ⑤初日の段取りを想定しておく。

(2)学級開き初日

- ①一年を見通した「目指す学級像」を語る。
- ②全員と対話することを目指す。
- ③前日に書いた手紙を一人一人に渡しながら、ひたすら名前と顔を覚える。
- ④時間厳守。(担任はいるだけ。誰が呼びかけるか様子を見ておく。)
- ⑤帰りの会を班隊形で行う。(教師主導で良い。“笑い”のある雰囲気で行いたい。)
- ⑥仮班(便宜的な班)の期限を説明。
- ⑦翌日の連絡と欠席生徒への連絡を密に。

(3)学級開き2日目～10日目

- ①自己紹介(自分の名前の呼び名の決定)
- ②クラス会議実施の承認を取る。(自分たちで話し合い、決めて、実行するってすごいクラスじゃない?と語る。)
- ③話し合いのルールづくり。(担任が“話を聞くとときはこうだね?”と提案してはいけない。)
- ④スタート班づくり。(誰が動くのか、誰が何もしないのか、誰が浮いてしまうのか人間関係を探る。)

- ⑤生活記録ノートから個々の悩みや思いを探る。コメントを必ず書く。
- ⑥朝・帰りの会のプログラム編成。
- ⑦朝・帰りの会の班会議に担任も参加する。
- ⑧週直、当番の仕事を確認。(一緒に行く)
- ⑨提出物の回収を確実にやる。
- ⑩基本的な生活習慣の徹底。時間厳守。
- ⑪空き時間に授業中の様子を見に行く。
- ⑫いじめと危険行為以外では叱らない。
- ⑬雑談の中で個々の学校生活における充実感を語る。(全員との対話を目指す)
- ⑭欠席生徒、登校をしぶる生徒には家庭訪問をする。本人・保護者の思いを聞く。
- ⑮学級目標、正式組織・班の決定。
これらを学年、一気呵成に行う。

4 おわりに(学級開き10日目以降)

どの学年も、清掃、授業態度、朝・帰りの会の進め方、時間厳守について、時期やタイミングを考えて厳しい指導(叱る)をする。それらは演技で良い。(生徒には気づかれないように)

学級が初日から荒れていることはなく、日々の生活の繰り返しの中で生徒、担任それぞれに我儘が出てくるものである。そういった綻びが出てきたときに、それに気がつき、修正(叱咤激励)できるかが担任として大切な力となる。外見や表面的なことになりがちだが、そこは一步譲って寛容な心で、内面的な指導であると良い。教育実習が楽しいのは、この修正場面を経験しないからである。

担任はいつか必ずこの場面に直面する。この叱咤激励を境に伸びる学級と停滞する学級があるのは事実である。

担任は、一年間を見通して、生徒の育成に何が必要かを考え、学級経営を進めていく責任がある。



すべては子どもたちのために ～学級経営を生かした「授業創り」～

山武市立日向小学校教諭 たかなし こういち 高梨 晃一



1 はじめに

本校は、学校教育目標「豊かな心を持ち、自ら学び考え、たくましく生き抜く児童の育成」を柱として、児童も教師も安心・安全に夢を楽しむ学校を目指している。その上で、担任一人ひとりの学級経営は大切な位置づけである。また、「授業を創る」上でも、学級経営の質を高めることは重要課題であると考えている。

私が学級経営を進めていく上で、大事にしていることが、「すべては子どもたちのために」という信念である。この考えを基本に、以下に実践していることを記していく。

2 実践内容

(1)ICTの活用

①電子黒板の活用

本校は、令和3年度に統合し、今年度で4年目を迎える。開校当初から、国内でも珍しい壁に備え付けの電子黒板が設置されている。電子黒板は、ワンタッチで字の太さや色を変えること、直線や図を描くことができる。また、知りたい情報を調べて提示したり、フォルダに保存した教材や挿絵などを自由自在に貼り付けて提示したりすることが可能である。これらの機能に加えて、一人一台端末との連携もよりスマートにすることができる。

②一人一台端末の活用

本校は、昨年度、文部科学省からリーディングDXスクールの研究指定を受け、一人一台端末の効果的な活用方法について研究を進めてきた。以下に実践内容を紹介する。

(ア)個別最適な学び

児童の端末内にデジタル教科書や自習用アプリを導入し、個々の実態に合った学習を自己選択・自己決定しながら進めている。

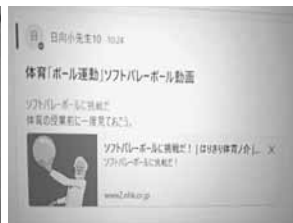
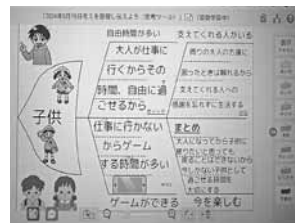
(イ)協働学習

グループ内でドキュメントを共有し、同時に編集することができるツールを活用することで、役割分担に基づいた学習ができる。考えをまとめたり整理したりする際には、思考ツールを活用することで、自分の考えを明確にし、話し合いを通してより理解を深められる。

(ウ)反転学習

授業内容に関する学習事項を事前にMicrosoft Teams アプリ上に上げて、前もって学習することで、授業内に問題解決、グループワーク、ディスカッションなどのアクティブラーニング活動に時間を使うことができる。

以上の実践から、一人一台端末を活用することで、デジタル社会で生きていくための基盤を学ぶことができていると考える。



(2)学級通信の活用

①学級通信の目的

学級通信の主な目的は、学校生活での出来事や自分の成長を振り返る場として活用することである。また、保護者に対して学級の状況や児童の成長を報告し、学校と家庭の連携

を図りたいと考えた。そして、何より学級や児童に対する担任の想いや考えなどを知らせることである。これらのことから、学級通信の発行を通して、担任自身が学級の様子をより深く理解し、学級や家庭にその想いを広げることができる。さらには、児童同士、児童と担任、児童と保護者の関係性がより深く築けるのではないかと考え発行している。

②授業創りに活かす

学級通信の内容は、日々の学校生活での出来事を中心に記事を書くことが多い。それに加えて、児童自身の学習した内容や感想文、作文などを掲載するようにし、「授業を創る」ことにつなげている。また、保護者に、授業の進捗状況や児童の反応を知らせることで、家庭でも授業の内容を話題にしてもらうことができる。授業の意図や価値を理解してもらうことで、家庭での学習支援がより効果的になり、保護者との協力関係が深まると実感している。

③学びの深まり

学級通信に、児童の学習の様子や学びの成果を掲載することで、児童自身が「授業を創る」プロセスに関わっていることを実感させることができる。また、学級通信を通して、児童同士の意見や感想の共有を図ることができ、クラス全体の学びが深まっている。

(3)外部人材の派遣要請

①いろはde歴史

「楽しく歴史の学習を進めていくために」という願いから、千葉大学教育学部教授松井聡先生をお招きし、御指導をいただいた。いろは……の順番が時代の古い順になって作られた「いろはde歴史」カルタを使い、これをすべて覚えると、たちまち歴史の流れが頭に入るという教材である。さらに、友達と関わりながら学習することができるので、児童は楽しく歴史の学習を進めることができた。

②アスリートから学ぶ

「夢をもつこと、楽しく運動に親しむこと」の大切さを学ぶことを目的に、新体操パフォーマー亀井理恵子さんをお招きした。元日本チャンピオンの超人技を実際に見たり、体の巧みな使い方などを丁寧な御指導していただいたりした。自己管理の仕方や夢を叶えるために継続的な努力を積み上げていくことの重要性などを学ぶ機会となった。二学期には、夢チャレンジプロジェクトの団体である千葉ゼルバ、千葉ジェッツの選手をお招きし、プロの選手の方との交流を通して、さらに夢について考えさせていきたい。



3 おわりに

担任として、児童が居心地のよい環境を整備すること、児童との信頼関係の構築、保護者との連携強化、これらが基盤にあって初めて授業が成立する。児童・教師・家庭が共に学ぶ方向をそろえていくことで学級全体の学びが深まり、授業が創られる。

「すべては子どもたちのために」。教師になりたてのころに抱いたこの信念を忘れずにこれからも子どもたちと共に成長できる教師でいたいと強く思っている。

すべては子どもたちのために

「先生、今日は『あいだ』ないんですか？いつも楽しみにしてらるんですよ。」
と、A・Mコンビ（その場で名づけた）に聞かれました。
この言葉から『あいだ』を心待ちにしている人がいることを知り、とても嬉しい気持ちになりました。それと同時に、「クラスの子どもたちのためにもっと頑張らないと。」と感じました。
先生も人間です。「面倒くさいな」「明日やればいいのか」などと、忙しさを理由に現実逃避（とうひ）してしまいたくなくなることがあります。しかし、そんなときに自分を奮（ふる）い立たせてくれるのは何かと考えたとき、浮かんでくるのは、「家族」「仲間（友人や同僚）」、そして「キミたち」の存在です。もちろん、自分も持っている目標や信念のような心の部分も大事ですが、やっぱり「自分に関わる人たちのため」というのが大きいように思います。学校でみんなと過ごしていると、子どもの純粋な笑顔や笑顔、何事もひたむきに取り組む姿などたくさんさんのパワーをもらっています。そのパワーが先生の頑張る源（みなもと）になっていることは間違いないと思います。
「すべては子どもたちのために」。先生が教師になったときに、最初に抱いた信念です。その信念は今でも変わりません。これからも、自分に関わる人たちのために自分の信念をつらぬき通すことのできる教師を目指したいと思っています。
ということで、1週間ぶりの『あいだ』ですが、これからもお楽しみに。（夏休みまでに40冊いけるといいなあ。と心の中では思っています。）

【学級通信「あいだ」第32号より】